

ノンコンタクトタイム

2025. 5. 13

「ノンコンタクトタイム」とは、保育士や幼稚園教諭が、勤務時間内に子どもたちと関わらない時間のことをいう。休憩とは異なり、業務時間として保育以外の業務を行う時間を指す。近年、保育現場では、保育士の働き方改革や保育の質の向上を実現する手段の一つとして、ノンコンタクトタイムが注目されている。このような時間を確保することで、事務作業に集中できるほか、先生同士の情報交換を行うこともできる。

ノンコンタクトタイムにおける業務は多い。日誌や記録の作成、週案、教材作成、保護者対応、遊具などの衛生管理、行事の準備、行政機関への提出や報告、諸団体の業務などがある。これらを短い時間でテキパキとやらなければならない。また、ノンコンタクトタイムは先生方が気持ちや考え方の整理を行う時間としても有効である。

小学校や中学校でも、ノンコンタクトタイムのような時間を増やしたいのではなかろうか。先生方が、子どもたちから離れてじっくりと授業のことを考えたり、教材を準備したりする時間を確保したい。それが、教育の質の向上へとつながる。また、このような時間を使って、勤務時間内に多様な業務を処理できれば、残業時間や持ち帰りの仕事の削減が可能となる。

一昔前と比べると、学校に勤務するスタッフは増えた。その学校の職員名簿を見てみると、見慣れない役職名が多いことに気が付くはずである。〇〇支援員、〇〇指導員、〇〇スタッフ、〇〇ティーチャーなど、名称だけでは、どんなことをするのかわからないものが並ぶ。これだけの人材を投入しなければならないほど、教育の現場は多様化、複雑化している。先生方の負担を軽減し、子どもたちと向き合う時間も確保しなければならない。

ところが、現実は厳しいと言わざるを得ない。人は増えたのだが、居て当たり前、必ず居なければならないはずの学級担任や教科担任の先生が足りない。人がいない。残念ながら、小学校や中学校では、ノンコンタクトタイムは程遠い状況にある。

では、どうすればいいのか。特効薬や即効薬はないのかもしれない。あったとしても、それがすぐにできるほど世の中の状況は甘くはない。働きやすい環境が整備されれば、人材の定着率も上がるはずである。教職の魅力というものが下がってきているのだろうか。いや、本来の魅力には変わりはない。魅力を凌駕してしまうほどの大変さ、困難さが、若者に二の足を踏ませているのかもしれない。

ノンコンタクトタイムような子どもと関わらない時間こそが、子どものことを考え、教育の質を上げることにつながる。教育は国家百年の計であることに変わりはないはずである。